
青玉

夕波 ちどり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青玉

【Nコード】

N4499W

【作者名】

夕波 ちどり

【あらすじ】

ティア・ラピス・ファレント。

優秀な魔法使いであり、その力故、幼いながらも一族の当主をとめる彼女。人々からは天才とも、化け物とも呼ばれるが、余り気にしない。

そんな彼女が唯一望むもの。それを叶えるため、彼女は今日も日々を過ごす。

序章

トランプのスペードのような形をしたこの島国。

この島国には3つの大きな権力が存在する。

まずは、この島国のすべてを統べる国であるトルセニア。

そして、トルセニアの国土内にありながら、同等の権力をかざす魔技術連盟・エルム。主に道具を介し、魔法を使う者たちで形成された組織だ。

さらに、この2つの権力と肩を並べる3つ目の権力。道具を介さず、直接的に魔法を使う、つまり魔力持ちの物たちの組織。4つの血族により取仕切られるシークスと呼ばれる魔術ギルドだ。4つの血族はトルセニアの東西南北、それぞれに拠点をおいている。

それぞれが領土を持ち、そこに町を開き、魔法を生業とする者たちが彼らに仕えている。

東に、ファレント。

西に、ガルディ。

南に、ホーラウス。

北に、セリアム。

その東の一族。

頂点に君臨するのは、齢僅か十六歳の少女。

ティア・ラピス・ファレント。

天才とも、化け物とも呼ばれる一人の女の子。

各一族には様々な特色がある。

北は魔物を使役する力を持ち、南は神の声をきき従い、西は精霊と言葉を交わせる。

そして、東といえば魔物の王、所謂、魔王と呼ばれるそれと人間との間に生まれた子の末裔とされていた。

その魔王の血を引く証とされるのが、赤い石。例外を除き、彼の一族のものは右手の甲に赤い石を宿し生まれてくる。その石は強い魔力を宿し、その石のお陰で彼らはシークスの中でもとりわけ強い力を持つ一族とされていた。

「まあ、今となっては本当に魔王の末裔なのかどうか、その真相はわかりません。ですが、四族の中で最も力が強い一族であることは確かですね」

教壇に立つ教師が手に持っていて本から顔をあげる。

金髪はくるくると綺麗に巻かれ、深みのあるエメラルドの瞳は見るものを捕らえて離さない。白い肌にメリハリのある体つき。学園一の美人教師と名高い、アンジェリカ・カリーリは艶やかに微笑む。彼女の笑顔に男女関係なく、生徒たちは頬を赤くし見惚れてしまふ。

ここは東の一族が治める里、コキヒ。その里の中にある唯一の教育施設であるシアン。その高等部一年生の特進クラス。

今は、歴史の授業中。アンジェリカは更に話を進める。

「私たちはその東の一族、ファレントの直轄の里に住み、恩恵を与っているのです。それに報いることができるようよく学び、励みましょっ」

そして、と彼女は続ける。

「御当主様の、ティア様のお力になれるように」

アンジェリカの視線は窓際が一番後ろの席に座る少女に注がれる。

そして、それにつられる様にクラス中の視線が少女に向けられた。

真剣に話を聞いていた少女はアンジェリカと目が合い、そして多くの視線が自分に注がれているのがわかった。しかし、特に動じることもなく、悠然とそれらを受けとめる。

黒と見間違うほどに深い鉄紺の長い髪。それと同じ色の瞳。

そして、何よりもその美しさ。アンジェリカのような、色気を感じさせる艶やかさではなく、何も穢れを知らないような、凜とした美貌。まだ幼さの抜け切っていない顔立ちではあるが、あと数年もすればそれもなくなるだろう。

この少女こそファレントの現代当主であるティア・ラピス・ファレント、その人であった。

先生、とティアの美しい声が教室に響く。

「どうぞ授業を続けてください」

にこりと、それは美しくティアは微笑んだ。

授業が終わり、教室を後にするアンジェリカ。

去り際に教室を見ると、騒がしい教室の中で一人ぼつんというティア。普通ならば、そこまで目立つようなことでもないかもしれない。しかし、ティアの場合は違った。只そこに存在するだけで、どうしても彼女は良くも悪くも人目を引いてしまう。

しかし、そんなことは気にせず、自分の席から窓からずっと外を見つめていた。

それだけでも、不思議と絵になる彼女。それと同時に、この教室の中で彼女はひどく浮いた存在だった。

「困ったものねえ、うちのお姫様にも」

誰に言うでもなく、アンジェリカはため息と共にそうこぼした。

そんなアンジェリカの心配などつゆ知らず、ティアは窓の外を見つめ続けていた。

ティアは授業と授業の合間の休憩時間になると、一人で過ごす人と自分から関わっていくようなことは決してしなかった。

周りも幼くして当主になった彼女にどう接していいのか分からず敬遠していたため、自然とそうなっていったのだ。

しかし、そんな状況にティアは不満もなかったし、それでいいと思っていた。特に問題などない。

だから、何故こんなことを言われているのかティアには理解できなかった。

「もつとクラスメートと仲良くできないの？」

放課後に話があるとアンジェリカに呼ばれて、歴史学の準備室へ行くため息混じりにそうなじられた。部屋に入るなり、いきなりだ。

ため息をつきたいのはこっちだと、ティアは心の中でばやく。

「先生、そんなことと呼んだんですか？」

暇じゃない。と口には出さないが、遠まわしにそう告げる。そして、相手の返事も聞かず、踵を返し帰ろうとするが、それは叶わなかった。

今まさに出て行こうとした部屋の扉が、『パンツ』と高い音をたて勢いよく目の前で閉じたのだ。

アンジェリカの魔法だろう。

「ティア様！ ちゃんときいて下さい。アンジェは心配して言っているんですよ？」

まともにとり合おうとしないティアにアンジェリカは声を荒げた。思わず素で話してしまう程に。

学校では教師として接するように強く言われていたので、他の生徒と分け隔てない言葉遣い、態度をとっているのだ。

「……先生？」

「いいえ、ティア様。真剣に聞いてください」

素で話しはじめたことをたしなめる様に声をかけるが、それはまるで火に油を注ぐようで。アンジェリカは怯むことなく、ティアを見つめる。

そんなアンジェリカの様子をみて、ティアは諦める。ちゃんと話さないと帰してもらえなそうだと感じたから。

事実、先程勢いよく閉じた部屋の扉が開かない。ピクリとも動かない。まだ、アンジェリカの魔法が続いているようだ。

歴史学の準備室は普段からアンジェリカが使っている部屋。当然、地の利が彼女にあるわけで。

(破れない事はないけど、学校の備品を壊しかねないし)

ティアは肩をすくめ、アンジェリカの向かいのイスに腰をかける。言いくるめて魔法を解除してもらったほうが、良いと判断したためだ。

「ねえ、アンジェ。心配してくれるのは有難いけど、本当にこれでいいと思ってるの」

「どうしていいんですか！？ 当主として、もっと里の者たちと関わるべきです。将来のためにも、信頼や忠誠を得るべきです」

熱く語り、更に言葉を続けようとするアンジェリカ。長くなりそうだなあ、と判断したティアはすっと目を細め、片手をあげアンジェリカの言葉を遮った。

その気も無い話に時間を割く気はない。

「言いたいことは分かるけど、正直そこまで手がまわらないの。今は里の体勢を立て直すことが先決」

それ以上の言葉は認めないという雰囲気、アンジェリカは何も言えなくなる。

自分の想いが伝わらなく、しかし、ティアのいうことも分かる。歯痒さから唇をかみ締める。

そんなアンジェリカの様子を見て、ティアは苦笑する。

「アンジェは本当に私のこと好きだねえ」

先程の雰囲気から一転し、柔らかな視線を向けられ、アンジェリカはぱつと表情を明るくさせる。

「勿論です！ 私の総てはティア様に捧げていますもの！」

「……ありがとう。でも、捧げるのは忠誠とかでいいかな」

「忠誠？ ふふつ、そんなものじゃあ生ぬるいですもの。それよりもつと、ねえ？」

（ねえ？ と同意を求められても困るんだけど）

熱っぽく語られ、ティアは僅かに顔を引きつらせた。気のせいで無ければ注がれる視線も妙に熱っぽい。

いつものことだが、いつも何かしらの危機感を煽られる。気のせいなのか、それともいつか慣れるのだろうか、と考えつつ、誤魔化すように、話の矛先をずらす。

「あと、そういう類のものは私個人じゃなくてファレントに捧げてくれるともつと有難いんだけどね」

「どうしてですか？ 同じようなものじゃないですか」

心底分らないという顔をする。アンジェリカにとって大差のないことでも、ティアにとっては天と地にも違うのだ。それらの所在が何処にあるかは。

「……私に何かあったとき、アンジェリカがそのまま里に仕えてくれないと困るでしょう」

「まあ、ティア様に何かなんて起こりません。そんなこと起こる前に私が守りますから！」

ティアの手をガツと両手で握り締め、瞳を輝かせる。

そんな様子のアンジェリカを暫く見つめていたティアだが、急に笑い出した。何事かと、目を瞬かせるアンジェリカ。

「アンジェは信頼を得るって言うけど、大丈夫だと思っのよ。だって、アンジェみたいに私を想ってくれる人はちゃんというもの」

ティアは立ち上がると部屋を出て行こうとするが扉の前で振り返る。

「頼りにしてるから」

アンジェリカはその笑顔に見惚れ、頬を赤く染める。

「はい！」

その言葉に、強く頷きながら返事をする。アンジェリカは涙すら零れそうな想いだった。

ティアは続ける。

「で、部屋の扉開けてもらってもいい？」

困ったように笑いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4499w/>

青玉

2011年11月6日03時08分発行